

平成22年度ソーレ関係者研修会

「男性相談の現場から～男性をめぐる社会規範と男性相談～」

講師 中村彰（とよなか男女共同参画推進センター すてっぷ館長）

日時：平成22年7月17日（土） 13：30～16：30

会場：こうち男女共同参画センター「ソーレ」3階大会議室

皆さん、こんにちは。大阪から参りました中村と申します。今ご紹介に、豊中市にあります男女共同参画推進センターの館長という形でご紹介いただきました。

思えば、2年ちょっと前2008年の4月からその館長をお引き受けすることになりました。それまでそのセンターにかかわっていたわけではございません。もともとで言いますと、大学を出た後長らく新聞社におりました。その新聞社にいたときに、男女共同参画にかかわる女性たちと出会いました。その人たちからいろんなものをもらいながら、ふと考えてみると、女性たちの抱えているいろんな問題も見えてきたんですけど、男性である私にとってと考えると、男性の問題もわんさかあるぞということを思い至りました。そしてそのことを解決するために、自分自身が乗り越えるための手だてみたいなのを模索していくという取り組みを、新聞社に席を置きながら市民活動として始めることになります。

その後、実は新聞社を50歳の時に辞めてしましまして、後はフリーの立場でこの分野のことにかかわってきて、突然というか呼び出しが、豊中市の担当部の部長と課長から連絡いただきまして、当初は市の男女共同参画の審議会の委員になってほしいと言われてました。お話しして別れまして、ほんの1週間ほど経ちまして、改めて再度部長が呼んでいると言われてまして、何のこっちゃいなと思って行きましたところ、すてっぷの館長ということで、審議会の委員から施設の運営に、財団ですけども、財団事務局長兼その施設で言えば館長ということをお引き受けした次第です。

ですから、今日メインでお話する男性相談ということ、あるいは市民活動の私たちの言い方ですと、メンズリブと市民活動という、あるいは市民運動みたいな形になると思うんですけど、そういったことというのは豊中のセンター云々ではなくてやってきたことが中心になろうかと思えます。改めて、今豊中市のその男女共同参画センターの中でこの分野の、あるいはもう少し広く男性側の問題についてどのようにアプローチしようかということは今考えているさなか、その中での思いみたいなのを語らせていただこうと思っております。

実は、つい先ほどと言いましょか、7月に入ってすぐに私にとっては非常に悲しい出来事が起こりました。それは若かりし頃に指導を受けた恩師の死ということなんです。新聞報道は多分5日の夕刊か6日の朝刊あたりに流れてたんですけども、その新聞報道の前に情報を得たんですが、その方から得た諸々、もっと言えば、私がなぜこんなところに立つ

てるのかと考えますと、直接的に男女共同参画ということでかかわりを持った人たちの何人かの顔も思い浮かびます。その人たちがあればこそだし、もっと遡りますと、小学校の1年のときに担任をしてもらった先生が朝鮮からの引き上げの女性でした。そうすると、戦争とか引き上げにかかわるような話を聞かされます。小学校1年生でどこまで分かるかということがあるんですけども、そういう幼いながらにいろんなことを感じたこと、そういったもの1つ1つの積み重ねの中で現在あると思っております。

実は先日、私の大学生の頃の恩師といえる人は2人なんですけども、そのうちお1人はもう4年前に亡くなられています。もうお一方というのがついせんだって亡くなりました。私の父親と同年でした。大正8年生まれ、90歳という意味では長寿を生きられましたし、学者さんとしての思いみたいなものを存分になさったという結果にありますから、そのこと自体はあまり感じませんが、身近に何かあったときにお声がけしてもらえる相手を失ったということを悲しく思いました。

私のその恩師というのは梅棹忠夫と言います。文化人類学の分野の方です。私は新聞社に入りましたし、男女共同参画のセンターにかかわってますよね。そういう意味では、恩師からすると自分と畑違いの分野に出ていった者ですよ。なんだけれど、いつまでも私を非常に温かく見守ってくれました。新聞社時代に、その新聞社で開かれました講演会にその恩師が話をされたことがあります。その方は単独講演というものを極力拒否なさってまして、誰かその相手となる人がいて、いわゆる対談というか、相手のもう1人の人がその恩師の話を引き出すような形を求められていることが多かったですね。その意味ではその聞き手の側に回った人の度量の深さによって、いっぱいいっぱいその恩師の持っているようなものをどう引き出せるかという醍醐味みたいなものもあるんですけども、そのとき私はその場におりませんでした。後日、その引き出し役をした先輩からこういうことを言われました。梅棹さん、あのときの講演でお前のことを、この新聞社に弟子がいるという言い方をしたぞという。ということは、温かく見守ってくれているという証かと思えます。

その方から実は男女共同参画を、全然そういう言葉もないままに最初に学んだということにふと気づいたことがあります。学生時代、よく恩師は「私の母は」という言い方で、明治半ばの生まれの母親さんがしっかりと仕事をしていた姿のことをよく話されてました。京都の西陣のご出身ですから着物の商いをして、着物という性格もあるんでしょうけども、ご夫婦で商いをなさっていた。そうすると、息子の立場から見て、家庭の中であれこれしているお母さん像よりも仕事という部分で頑張っているお母さん像の方がより鮮明に残っていて、こういう言い方です。私の母親を、通常は結婚している女性のことを奥さんという言い方をしてきましたよね、そうすると私の母は奥さんという言い方は私の母には合わない。

若い私たちは「そしたらどう言えば、お母さんのことをピッタリくる表現になるんでしょうか」と聞きますと、「そとさん」だという言い方をしました。そういう意味において、女性が外で頑張るということに対する目線。それをその方のお母さんを通して学んだとい

うことになりますし、そういう流れがあるんでしょうか、後日上野千鶴子さんが演者となりまして、主婦論争をやりました。勁草書房から主婦についてのいろんな方々の論争みたいなものを拾っていかれた本がありますけど、その中に実はその恩師が登場なさってます。いわば、私も上野さんもその方からいろんな影響を受けた1人ということになるかもしれませんが、その方は非常に魅力的なタイトルの雑文、恩師は論文と言っているらしいんですけど、エッセイに近いような論文ということ。

その方は普通の大学の何とかというところに書くというよりは、中央公論とか婦人公論によく弁を書かれてきました。その中の1つとして婦人公論の1959年6月号なんですけれども、「妻無用論」というのを書かれています。今の時代、妻なんか要らなくなったという論文です。それは、結婚なんかしなくていいぞじゃなくて、結婚をする、夫婦として暮らすということの中身、意味みたいなものがこれまでとは違った意味あいでも問われていますよというメッセージです。その方から教わったことと言いますと、要するに明治から以降の私たちの暮らし、この分野で言えば性別役割分担とか分業と言っている部分です。それを引いたのは明治政府であり、そしてモデルになったのは武士階層の生き方である。ですから武士が、男たちはお城という会社に出向いていく。女たちは家庭を守るという形の分担。そういったものを全国に広げようとしたのが明治政府で、それに乗っかって進んでいった。

でも、そういったあり方を問い直す時代が変わった。それは1つの文明社会の変化というものに結構敏感であった方であるのかもしれませんが、家庭電化製品みたいなものがたくさんちょうどその頃誕生してるんですね。例えば洗濯機にしる掃除機にしる、あるいは電気釜にしる冷蔵庫にしる、電気製品が大量にできた。そうすると手仕事としての家事というものから、そういった電化製品を使う形の家事が変わっていく。そうすると、女性がその部分を担っているとしてですけども、その部分の負担量って軽くなっていきますよね。洗濯板でゴシゴシ洗っていた洗濯が、今風で言えば全自動の洗濯機に放り込めばいいとなれば負担量は軽くなりますよね。そうすると、昔のその分けて考える考え方の中に、家事という部分の重労働の部分に女性が担うということで分担し合いましたけど、その負担量が軽くなる。

だから、それを妻の役割と考えてしまったら、妻というものは要らなくなるでしょう。そうやなくて、もう一度その問い直しをしましょうということ。ですから女性が女性として、夫の付属物としての妻という立場じゃなくて、独り立ちした女性として輝くこと。そして、男たちも独り立ちして輝くこと。そういったものが整ったうえにおいてペアで生きるということの意味を、夫婦ということでは考えようというようなことをした。大正8年生まれの人がその時代にそんなことを言い出していたということ、改めて今この分野にかかわって思うときがあります。そういう先見性みたいなもの、あるいは時代を読み解くという部分において非常に優れたものを持っていた学者さんであったんだなということ、改めて思います。確かに文化人類学分野でのいろんな業績もありますけど、そう

いった今の男女共同参画ということを考えてときにいろんなヒント集みたいなのも提示してくれた恩師が亡くなって、ちょっと心の中がじんわりとしている状態ではありますけれども、それを押してというか、勇気を持って話を出させていただいております。

そういった形で、若かりし頃の女性学とか、そういう言葉もまだない時代にそんなことを教わりました。そういったことがまず下地にあるだろうし、文化人類学というものは文化の相対性みたいなものですから、何々が唯一絶対のものという認識をしません。そうすると、男性中心主義の社会というものも1つの有り様として見れば、違う有り様だって許容量として出てきます。そういう目線でいろんなものを学んできてお話をしてるんです。

そういう流れの中で学んできたんですけれども、あるとき新聞社時代です。60数歳になった私がまだ30代後半のことなんですけど、ある女性と出会いました。その方は実は上野千鶴子さんに教わっている方でした。というのは、学生さんじゃなく、大学で教えてもらっているんじゃないかと、例えばこういう施設の講座生として、上野さんが講師としてというような形で出会って、大阪市の婦人会館というところでした。今現在はクレオ大阪中央という施設に生まれ変わりましたが、その前身であります婦人会館は非常に長期にわたる講座をその看板になさってました。2年とか3年コース、実は私たちもある時期「男性学講座」というのをそこで開かせてもらったんですけれども、それは1年でした。男たちにするとしたら、そこでは長期にわたる2年というようなコースをしてたけれど、それでは男たち集まんやろうということで1年の、60回の講座もどうかかなと思ったけれども、女性に向かえば2年ぐらい、少なくとも。

そういう中で初年度はいろいろ教わっていったようなんですけれども、2年目、自分たちでお勉強しながらというか、課題を与えられて何か調べてくる。何でもいから自由にやっごらんという感じの流れになった。私のその知り合った女性というのは4人の仲間で、大阪の新興住宅地に住む女性を対象としたアンケート調査をしようとなさってました。お墓がテーマでした。女性とお墓についてどう認識するのか。思っているのかという問いかけでした。そこで、私は新聞社にいたもんで、何か面白い結果が出そうだなという何かひらめきがあったんです。宗教の立場でお墓を考えると、歴史の立場で考えると、そういったことは一定理解できるんですけど、女性学の勉強してるんですという人たちがお墓をテーマにするとしていたときに、何か思いもかけんような面白いデータが出るんじゃないかということで、4人で一緒になさってましたので、その人たちをしばらくマークしてやろうというふうな感じで最初認識してました。

その方がいろいろその調査をしたりしていくについて、私の知る範囲、アドバイスしたり援助もさせていただきました。例えばお墓について民俗学という立場から見たらどう見えているのかとか、日本人の祖先に対する考え方みたいなもの、民俗学という立場から見たらどんなだろうかとといったあたりの、私の守備範囲みたいなことはお伝えをしたりしてたんですけど、しばらくしてから電話がかかってきまして、自分たちなりにまとめてみたんですけど1回読んでください。新聞社にいたからなんでしょうね。その文章をちょっと

チェックしろという話をしたときに、そのときに実は私にとってはかなりショッキングな調査結果が出てました。

まず、夫のいなかの墓に私は入りたくないという回答がありましたし、しゅうと・しゅうとめさんと同じ墓は嫌だという回答がありました。それは、言えば嫁・しゅうとめ問題とかいう言い方の中で言われてきたことの1つの答えですよね。そのあたりは当時の私も素直に理解しました。ああそういう考え方もあるでしょうね。これまでだったら、露骨にそういう形で回答は出なかったかもしれないけど、この人たちは上手にそういう回答を引き出したのかなということも含めてですね。あと3つ目の夫と同じ墓は嫌だという方がいらっしたんですね。それって何なんだろう。一緒に暮らしながら、生活を共にしながらもお墓を別に考えようとしている。自分だけの墓をイメージする場合もあれば、実家の墓をイメージする場合も含めて、夫とはその時点では決別しようとしている。でも暮らしの中で言えば、どちらかが先に亡くなり見送るまでは夫婦としての暮らしは多分続いていくんだろうなという中でそういう考えを持っていらっしやる。これってどう考えたらいいかということ、そもそも私がこの分野に足を踏み入れるきっかけとなりました。

そういうことを通して、女性の置かれているいろんな問題、嫁という立場であったりいろんな形がある中でいろんな問題、それをアンケート調査の回答としての諸々もありますし、調査した4人の方たちの問わず語り、私とその方とその方の夫さんとの関係の中でかぶっていらっしやる諸々みたいなものも問わず語りで聞けました。そういうことを通して、少しずつ女性たちが今の社会の中でいろんな縛りを受けたり、悶々としていたりしている姿というのを垣間見たということになります。そのことについて理解が及んだことはプラスだと思うんですけど、そしてふと考えたときに、例えて言えば、その人たちはそうだけれど自分の妻はどんなんだろうかということで、女性のあの問題にもつながりますね。

その後、そしたら長男という立場で生きてきた私はどうなんだろう。彼女たちがいういろんな諸々というのについて、それはそれとしながら、そしたら男たちは何の問題もなくいきいきと生きているのかというと、そうじゃないぞという。自分自身もいろんな縛りの中でしんどい思いをしたりしている。そしたら、女性たちのいろんなしんどさをぬぐい取っていく作業がこのフェミニズムだったり女性学であったりとするならば、それも当然していかないかんわけですけど、あるいはそれが今の社会の状況からいうたら、むしろ優先課題かもしれないけれど、男たちの側の問題にもメスを入れるというか、すくい取るようなことも合わせて必要なんじゃないかということに思い至り、それが言えば女性相談だけじゃなくて男性相談も必要じゃないかといったことにつながっていくということなんですけど、そういう思いの中で男たちの集いを始めようということになりました。

その方から、結構飲み友達的な形に親しくなっていきまして、あるとき自分たちが面白い企画をするからぜひおいでと言われたことがございます。1989年の9月でした。思えば今のところにつながるんですけど、今のすてっぷという施設はもともと豊中市にありました婦人会館という施設と働く婦人の家という2つの施設を合体させる形で10年前にスター

トしたんです。実は、そのうちの1つの働く婦人の家というところを会場にしたイベントでした。面白いことをするからぜひおいで、きっと新聞社の仕事としても役立つよということをおっしゃいました。そうおっしゃれば、前の調査のこともありますから、また面白いネタが拾えるかもしれないというちょっとゆがんだ根性かもしれませんが、そんなものを持って参加しようと思いました。

そうするとだんだん話がエスカレートして、最初は面白いよ、おいでおいでだったのが、せっかく来るんだったらフロアから発言してよになったんです。そのうちに、パネラーとして参加しなさい。パネルディスカッションだったんです。そのうちに、私が司会進行しようと思ったけど、あなた司会してよということになって、当日私は司会進行してました。パネルディスカッションで、テーマは「男はフェミニストになれるか」というテーマでした。これも多分この分野の、女性から突きつけてきた大きな問題提起だと思ってます。女性たちが女性たちだけで集うことによって、自分たちのことを見据えていろんなことを学び、それによっていろんなものを問題提起してきた流れの中で、そこに男たちが混ざることの是非みたいなことがありました。

男女共同参画というように、当然最終的には混ざっていろいろということになるわけですけど、ある段階において女性たちだけの場ということを持つことがそういったものをあぶり出していく。あるいはエンパワーメントにつなげていくための場として必要なんだという立場で見たときに、その人たちがやっていた「日本女性学研究会」というグループでしたけども、そこに男たちが混ざることに対して、要するに違和感を感じる人たち。そのパネルディスの隠れたメッセージは、「男たちよ、あんたたちの場を持ちなさいよ」ということでもありました。自分語りをしていく、自分を見つめていく作業の中に、私たちは女同士という中でしばらく進めたいと思っている。あなたたちもいろいろ問題があるとするならば、男同士でそういう場を持った方がいいんじゃないのというメッセージだったんです。私はその裏メッセージもその人からは指摘されながら、司会を進行させていただきました。

そのとき男たちが5人ほど前に並びまして、私が進行で話を進めていったんですけど、それを聞いていた女性たち、会場には男女もいたんですけど、こんな設定にしました。最初は、第1段階は前に並んだ男たちの話になります。その次に会場発言をもらう形になりました。前半はその会場にいた男しか駄目よという段階にして、最終的に女性もいいよという形の展開になったんですが、そしてそのときに結構司会進行していた私の感触で言えば、前に並んだ男たちはかなり本音トークをしていました。普通なかなか男たちって中身見せないねという、女性たちから見ればありますよね。そういう部分がある程度ぬぐい去っていたようにも思います。

ですけど、そのときのことをそのグループの会報がありまして、月々出てたんですけど、その会報にある女性がこう指摘していた。男たちは全然本音トークをしない。建前ばかりで話とったというような指摘がありました。女性たちから見れば、まだまだそういう

硬さが見えたんでしょうね。全面的に自己開示していたわけじゃないかもしれませんが。ですけど、いた男たちの1人としての実感としてではかなりの部分自分を出してきたなと思いました。それが第1歩だと思ったんです。そして、こういう場って必要なだろう。男たちが自分というものをガチガチにガードしまくる形じゃなくて、自分のほんとの心根の部分の思いみたいなものを語り合って、それを許し合えるような仲、そういう場というものが必要なだろうという流れなんです。

89年に今のものがあった後に、90年に男たちだけで同じような仕掛けをやりました。その2つはどちらかというとなんて単発ものなんですけれども、その2つを経験した後にもう少し、せっかくこういう出会いができた。その核になる何人かが揃いましたのでグループ活動にしようということで、91年の4月から「メンズリブ研究会」というものがスタートします。2月に一度集いをもちます。私は一生懸命フォローを、こんなことを言いました。「メンズリブ研究会」と「研究会」という名がついてますけれども、研究者の段階じゃなくて相互カウンセリングみたいな、あるいは井戸端会議的な感覚の集いです。そこでいろんなものを開示していこうということ。

そこで1つ面白いことと言いますと、結婚して子供のいる男性に向かったのメッセージで言えば、「お父ちゃん、お子様連れでどうぞ」です。女性たちがこういうところで学びをするときに、幼子を抱えた中でなかなかそこには出てこれない。そしたら託児という形で子供を預かってあげるからお勉強しなさいねというのが、こういう施設の1つのあり方ですよ。とよなかすてっぷのすべての事業に託児をやっています。そういうことが1つのメッセージであるんですけど、男たちへのメッセージは逆に、子供を遊ばせながらという場を用意しよう。どっかへ預けてしまうんじゃなくて遊ばせながら、だから実の父と子という関係で言えば、自分の子供を面倒見てるわけですね。周りの男たちも、自分の子ではなくてもそういったことにちょっと子供の相手をするとかいったことをしたりする。そして、そういう子供たちを遊ばせながらいろんな話をしていくという場づくりをしていこうとしました。

そしてちょっとへんてこりんな男たちという意味では、例えば男たちが何人かで喫茶店へ入ります。大体コーヒー一辺倒かもしれませんね。あるいはそこに紅茶組が混ざるかもしれません。そのグループで喫茶店へ入りますと、パフェであるとかいろんなものが登場します。それは、その方がどうしてもパフェが食べたいということで毎回毎回パフェなのかというところじゃなくて、そのときの自分の好みによって、甘いものが欲しいなと思えばそういったものに手を出す。そうじゃなければコーヒーを飲んだり、いろいろそのときそのときで変わっていくんですけど、そういったことを。それも言えば、みんなコーヒーだからコーヒーにしとこなんていうことじゃなくて、自分の好みをしていくような形。そんなものを2月に一度活動を始めました。

そうした中にも、実は私たちの仲間の1人に、愛称で言ったときに「たっちゃん」と女性たちから呼ばれている男性がいます。下の名前の方で「たっちゃん」。少し前までという

か、現在もかな、大阪府立のドーンセンターの事業コーディネーターをしていた田上時子さん、現在は宝塚市のセンターの NPO として指定管理取ったりされてますけども、田上時子さんからたちちゃんに対してある本がプレゼントされました。「この本読み、きっと参考になるよ」。それが実は文献の中で言いますと、下の方から少し上、ダニエル・J・ソンキン他という形で書いてあります「脱暴力のプログラム」という本です。これは翻訳本です。この翻訳が出てからだったら男たちも楽だったんですけども、英語の本を渡されて「これ、みんなで読みなさい」ということだった。

実はこの本というのは、ドメスティック・バイオレンスの加害者に対して書かれたハンドブックです。その加害行為をしないようにするためのハウツウみたいなものですね。暴力に至らない形で、自分の気持ちを処置していくための手だてみたいなものを書いた本なんです。そういうものを英語の辞書を引っぱりながら、そしてその頃ドメスティック・バイオレンスって何のことやら分からへんなど。そこに出てくる心理学用語にしてもなじめない言葉で、どう訳したらいいのか分からんというようなこともありながらなんですけど、少しずつやっていく。そして読みながら、自分たちのその「メンズリブ」という市民活動につながる話として理解をしていくことになります。

そして思ったんです。まず、この本を翻訳したいなということに思い至りました。出版社との折衝とかいろいろしてきました。結果として、それは不発に終わってます。だから違う方の翻訳です。これは違う方の翻訳になってるんですけども、そういった出版するということがある程度形が見えてきた頃に、それはぼしょってしまうんですけど、それが見えてきたときにこう思ったんです。この本を翻訳して出版する。暴力行為を繰り返す男たちに読んでもらって、そういうことの間違いに気づいて、暴力という形じゃなく、力・パワーのコントロールという形じゃなくて女性と向かい合える人間に変わってくれる、その素材としてその本を出版するという事は私たちが思ったことなんですけど、ただそれでいいんだろうか。

それだけでいいんだろうかということに至りまして、自分たちでその翻訳ということ以外に何ができるんだろうと考えながら、電話相談ということに思い至ることになります。ですから、後に「男悩みホットライン」という電話相談を民間でスタートさせたんです。それが 1995 年の 11 月にスタートさせたんですけども、そのときに至ったのは DV 加害者に対する取り組み。そこから電話相談という形でサポートできないだろうかということが始まりました。ですから、当初その相談というのは DV 加害者相談みたいなものをイメージしてたんですけど、当時まだまだ暴力のどうのこうのと言いますと暴力団絡みの諸々のもののイメージしかまだ定着していない時代ですし、またもう 1 つ言えば、男の悩みってそれだけと違うやろう。もっといろんなことに受け皿としてできる相談事業にしよう。暴力に特化してしまうと暴力団云々ということだけで終わってしまいかねないという要素がありまして、スタートした時点で「男のよろず相談」という形を取らせていただくことになりました。

だから「メンズリブ」という市民活動、自分たちの井戸端会議的なグループの活動をしてきたこと、そこからそういう施設づくりに励んだこと。実は、その当時非常にけん引車として私たちをリードしてくれた男性がいました。私より少し上の方です。ところが残念ながら、阪神の震災で亡くなってしまいました。それで1回頓挫してしまいます。当初の予定では、もちろんそれにかかわるメンバーがカウンセリングなんかの勉強をしてという、1人1人の準備作業は進みながらです。そしたら、スタートさせようとする、どこで電話を受けるのかとかいうことになってきます。そのときに彼は自分が退職後に何か事業をなさろうと思っていらっしやいました、別の事業を。その事務所を構えようとしていた。どうも、その方の発想の中に電話が2つという発想があった。電話機を2つ置く形で仕事を始めようとしていたんですけど、そのうちの1台を相談用に回してもいいぞという話があって、しかもその方が事務所を開くということですから、その場所にべったりでないまでも相談ワーカーの人たちが行って電話を受ければスタートできますよね。

そういう電話を実際にやり取りできる場所の確保みたいなものが一定見えて、自分たちもそれなりに研修を重ねていって、そろそろスタートできるかなと思っていた矢先に、その中心であった人が亡くなってしまいました。その方を頼りに場所も決めていたわけで、そこでどうしようもなくなりました。そしたら、自分たちで場所を確保する必要があった。そのときに電話相談ということだけで、毎日毎日きちっとオープンした形であればそこで延々としていけばいいわけですけども、人手も少ないし、当初月に2回、後に月に3回になりますけど、いうレベルですと事務所を使わないときも出てきますよね。一定の家賃というものを支払っていかないかん。そしたら、違う活用もしよう。

それでまた、当時私が思ったのはどこで電話を受けているかということをおフにしようということも1つありました。だから、そのスペースを名乗る団体というのは別につくりました。それが、英語名で「メンズセンタージャパン」と言いますが、そういうものをつくりました。小さな部屋ですから大勢の人が集まるわけにはいきませんが、少人数であればそこでいろんな集会をしたりもできる。その電話相談の時間帯だけは皆さんはオフにして、相談員だけがそこにこもるという形の展開ということで、95年の11月にスタートすることになりました。事務所そのものはその前の月の10月にオープンして、それがメンズセンターというスペースの確保、市民活動の拠点となる施設ということを前面に出して、相談についていえばちょっとこっそりと、そこではしてるということをおフにしながらスタートするという形になりました。

当初、私たちは周りからこう思われてました。男性向けの相談事業を民間でやろうとしている。ですから行政のということではない形ですよ、いわゆる信頼性みたいなものが一体どこまでできるかということが1つありますし、民間の細々としているそういったボランティア的な部分の中で、そしたらどこまで電話をかけてきてくれるかという問題があります。今言いました、男たちなんか電話なんかしてきよらへんぞという話だったんです。私たちも実際どうかなと心配はしてました。幸いにして、当時新聞が書き立てました。ち

よっと情報は流したんですけれども、朝日とか毎日とかいう中央紙だけではなくて地方紙、こちらの新聞に出たかどうかまでは分かりませんが、共同通信社とか時事通信という流れで地方紙にも出てきました。そういうことで、初日から電話というものが鳴りました。

実はそれは月曜日の夜に設定されて、月曜日の夜2時間です。その部分にちょっと入っていきますと、月曜日って単純な平日と振替休日みたいな月曜日ありますよね。実は大体平均すると現在まで1日に4.5人ぐらいの相談が入るんですけど、単純平日と振替休日、振替休日って非常に開店休業に近いです。男たちにとって悩みを打ち明ける電話をかける時間というものは、平日の夜の時間の方がやりやすくて、休みだとかけにくいようです。あるいは家にいらっしゃる女性だったら、夫がいない時間帯にということもあるかもしれません。男たちにとってはそんなことが1つ、結果的にいえば言えるわけです。

当初全国的にそういったものが流れたということもありまして、全国各地から電話があります。年齢もまちまちです。ということのスタートになりました。私自身は当初そのメンバーに入ることはできませんでした。仕事を抱えていたという中でなかなか時間が割けないし、その月2回なら2回、2時間ずつ時間を空けるだけじゃなくて、もっと前段としてきちっと相談者として電話を取ることができるまでのそういった力を自分の中につくらなあかんですね。その指導してくれた臨床心理士がいるんですけど、その方が模擬でやっているやり取りを見ながら、あなたは本番取ってもいいよと言ってくれるまで尽くしていかなんわけですから、それがなかなか難しいことなのでなかなかできませんでした。

でもあるときから、熱い思いを持ちながら途中で亡くなってしまった先輩のことも思いながら、その方からもちゃんとメンバーとしてやってねということ言われてきたということも含めて、何とかしたいなと思って、そして私たち、関西にある某カウンセリングセンターのカウンセリング講座というものをみんなで受講しようということに一応決めていたんです。それをちゃんと乗り越えたら一定の学びができたということの1つの証にしようということで、私もそのカウンセリング講座に行きました。

ここに相談員の方もたくさんいらっしゃると思うんですけども、どうなんでしょうか、私はその民間の勉強の講座だったんですけども、先生方というのはその道のプロ級のプロだったんです。ユング派の心理のことを日本に導入した第一人者とか、そんな人たちがいっぱいだった。それぞれの分野で並んでいらっしゃいました。名前だけ見たときに、ああこんなすごい人たちからお勉強できるのか、嬉しいなと思ったんです。ですけど、いざ蓋を開けてみると私には全然響いてきませんでした。カウンセリング技法としてこうしたらいいんですよと、その技法を学ぼうとして入ってるわけですけど、その技法を学ぶときの例え話というんでしょうかね、こういうケースとかいろいろ出てきますよね。その話の中に、こういう話の流れの中でこういうようにしてという、そういう例題として出てくるのが男女共同参画という分野を学んでしまった私にとっては非常に抵抗感の強い話ばかりなんです。

男はこうあるべし、女はかくあるべしということを前提としたような中の、先生の中にもそれが入ってますよね。そういうことを常識とする中での対応のケースとして出てきます。せつかくすごい人がいながら、そのことで入れないためにその技量を学ぶというところまでなかなか入れなかった。現在、そのフェミニストカウンセラーという一定の形も整いましたし、そのお勉強をなさっている人、人材もたくさん育っていらっしゃると思います。そういう意味では、例えば男女共同参画目線から見た相談ということをしちっと話していきける男性の相談員というような限定で考えたときに、なかなか育ち切れてないのかなということだと思います。それを何とかしていかねばならないのかなということをおもいました。

それと私たち、民間でその「男悩みホットライン」というのを立ち上げたと言いました。そのときにやっぱり当然2つの立場の人たちが混ざっています。いわゆる市民運動、市民活動系で男女共同参画を学びというか、もっといえば、メンズリブということで男たちの自己改革みたいなものを何とかしていかねばならない。その延長線上の中での男性の相談という、その辺を相談していこうという人たちとそうじゃなくて、それは後からの話で、まずは臨床心理士なり産業カウンセラーとしての学びをして、まずそういうものを身につけたうえで、そういった男女共同参画目線というものを合わせて持つ中で対応していこうとする人たちの間で、どうしてもちょっと水と油的な要素がつきまっています。

私自身はむしろこうおもいました。実は、あるところでそういった男性相談員研修みたいなことにもかかわったりするんです。そのときにいつもおもってますのは、長期にわたってきちっとできる講座設定であれば当然しっかり入れ込んだらいいんですけど、あまり短時間でしかできないときにまず何を優先するかと考えますと、まず男女共同参画ということに対する理解度、認識度というものを学んでもらう。そのうえでカウンセリング技法なんですね。電話相談としての対応の技量なりを学んでもらうということの方が大事ではないかなという気がしていて、短期コースで、まずは今の社会を見るときに男女共同参画目線から見えていく姿勢というものを、どこまでその方に入れていただけるかということをお優先しようかなという気はしていますけど、その中で私自身も、逆に言えばそれを先しすぎたために、一般のカウンセリング講座でちょっとしんどい思いをしてしまったということもあるんですけども。

当初からかかわってくれている臨床心理士からこんなふうな話を聞きました。私たちは一応男性からの電話相談を男性が受け止めるという形の設定をずっとしてきました。ですから「私の夫は」という形で女性から電話入ることはありますけれど、基本的に言えば男性が男性に向かってする相談という形です。ですから、女性のご自身の問題として悩みを抱えていらっしゃるって相談に来たり、電話なり面談という形で入っていかれたときの姿というのは知らない状態なんです。その臨床心理士はいのちの電話とかいろいろかかわる中で、男性に対しても女性に対してもそういう電話相談としてかかわってきた経験の中でこんなことをおっしゃいました。

かけてくるのが男性か女性かで随分違うということをおっしゃいました。女性だったと

思うんですけれども、自分の恥というのか、さらしたくない部分、相談の中身ってそうですよ、だれかれなしに「私こうなのよ」なんて言うことじゃなくて、なかなか言えないようなものを抱えている。それを吐き出すことで何とか乗り越えようとして、そういうところへつながっていきこうとしているわけですよ。そうすると、やっぱり女性だって最初なかなかすぐにオープンにできないかもしれない。だんだんとやりながらでも、せっかくながつながったんだから、かけてもつながらないこともある中でつながって、相手がちゃんと対応してくれてるんだからという安心感の中で、自分の中の窓をどんどん出していく形ですよ。

男性も同じなんですけど、その時間差があります。女性はかなり短い時間の中で踏ん切りをつけてと言いましょか、しっかりと自分というものをい出されながら、相談員の方の相づちなり、少ししたお声がけを頼りにしながら、自分見つめをしていく。それに対して、男たちはなんか外周道路ばかり走っているような感じがして、なかなか本筋に入っていけないということがありました。でも、男たちも少しずつ少しずつ入っていけるようになったというような気はしています。

それとちょうど「男悩みホットライン」という男性向けの相談を10年続けたときに1冊の本をそのメンバーは作って、「男の電話相談」という本なんですけど、その中で10年間の1つのけじめとしての数字を少し上げますと、件数は増えているんですけど、大体状況としては変わってないです。10年間で1,213件の電話がありました。その中から無言電話であったり、女性からの電話であるものを省いた中で、男性が自らの悩みを語った電話についてということと言いますと、年齢的に言えば、ただ必ず年齢を聞いてるわけじゃないので分からない部分はあるんですけど、ご自身が10代ですとか40代ですとか名乗られたケースの中で見ますと、10代から70代まで幅広くかけていらっしゃる。大まかにいって、30代ぐらいが多いのかな。30代、20代ぐらいが多いのかなという印象はあります。北海道から沖縄まで全国各地からかかってきます。それもはっきりとどこからというのが分かった範囲の中ですけども、そういう範囲がある。

それから悩みの相談の中身ですけども、性、セクシャリティに関する悩みというのが42%、自分の性格や生き方というのが14%、夫婦の問題というものが12%、DVが14%という形です。結構性に関するものが多いです。自分の性器の問題、大小ですね、男性器が大きすぎるんじゃないか、小さいんじゃないかというような悩みというものもあれば、セクシャリティ系ですね、同性愛ということもあれば性同一性障害の悩み、そういった諸々に関するもの、それを広く性ということにとらえたときに結構パーセントとして増えてます。

こちらの相談がどうか分かりませんが、私のかかわった中で行政枠とする男性相談、例えば私の経験では大阪市の相談であるとか、大阪茨木市の相談であるとか、静岡であるとか面接に来たときにいるんなものがあるという意味では一緒なんですけど、比率的に夫婦とかがっていう類型がパーセントとしては多いような気がします。そこに民間でやっているこの電話相談としての特色として言えば、性に関する比重が少し高いのかなという

印象はあります。ただ、どこの相談にしましてもいろんなもの出てきますから、しかも行政相談にしてもここの相談にしてもこちらでは分かりませんが、毎日のように開設する形じゃなくて、特定の日であったりすることも含めて、絶対数的な件数というものは低い中でのパーセントということなんです。ただ、受けた感触としてはそういったものがあるということは伝えておかせていただきます。

そんな中で電話相談というものをやり始めました。10年、15年というものが経ってきたわけですが、その後行政の方々からご相談を受けながら、関西を中心なんですけれども、電話相談という枠であったり、電話相談も面談も両方したいという中でそういう活動を始めていくことになりました。私自身が経験したケースで言うと、大阪市の男性相談というものにはかなり深くかかわらせていただきました。大阪市の電話相談というのは2004年4月スタートなんですけど、その少し前にクレオ大阪中央、先ほど言いました施設で「男のフェスティバル」ということをやりました。男女共同参画にかかわる男性側の問題についていろいろと分科会をやりましたという形のイベントを2日間にわたってやりました。

ちょっと余談ですけど、この施設はどうか分からないんですけど、こんな印象を持ちました。私たちがこういうものをやりますということを広く世間に告知して、集まってもらおうということを当然するわけですが、できたらその会館のある近くの地域の人たちにも参加してほしいと思ってビラまきをいたしました。そして、その地域の人たちと出会った中でこんな質問が出てきました。「あそこの施設、何してはるんですか」という問いかけでした。

ところが先ほども言いましたように、大阪で言いますと大阪府立の婦人会館がドーンセンターの前身ですし、クレオの前身である大阪市の婦人会館にしましても、関西エリアに住んでいる女性たちにとって、あるいはこういった女性問題、こういったものについて悩んだりなさっている方々にとって何かの突破口、ヒントをもらおうとして出向いていく先として言えば、その2つというのは結構有名な施設だったんです。言えば業界内の人たちにとっては、あそこは別格よというような施設でした。にもかかわらず、地場の住民たちにとっては、あそこ一体どんなどこという印象になっていた。そういったものも、こういった施設の中が世間にきちっと認知していってもらう1つのハードルの難しさみたいなものを少し感じました。

例えば公民館であるとか図書館であると、名前見ただけでどういう施設か分かって、自分の目的に応じて出入りしますよね。でもなかなか得体が分からないという中で、近くにあっても近づかなかったり、でもほんというところ、その施設は特に女性たちにとって自分の生き様、生き方を問い直そうとするときに非常に貴重な文献、資料があったりする貴重な施設なのに、そしてすぐ近くにあるにもかかわらずそういったものを利用できていない現実みたいなものもちょっとあって、その辺もちょっと、今豊中の施設の預かった立場で言うと気になる場所でもあります。阪急電車という施設の豊中という駅にすぐつながった

形のビルの中にあるにもかかわらず、例えばどこまで豊中市民に認知してもらえてるかというのなかなかハードルが高いんですね。それ、どうしたらいいのというのは1つの大きな課題でもあります。ちょっと余談ですが、そんなことも思っております。

そこで、男たちの問題についていろいろということですが、ちょうどその頃は女性専用車両というものが登場しだした頃だったので、それに対する是非の問題とかいうようなこともあれば、男性がスカートをはくことの是非みたいな、そんなこともありました。性同一性障害とかそういった方たちが自分のアイデンティティを表現する手段としてお化粧したり、スカートはいたりという形でアピールするというのが1つにはあります。スカートということだけにはそういう1つの流れがありますが、私たちが関わった「スカートをはく会」とかいう、ちょっと正式な名前忘れてしまいました、ですと、男は男なんです。だから、すね毛だらけの素足をさらしながらスカートをはく。だから、アイデンティティとしては男ということを出してはるわけですけど、でもスカートはいてなぜ悪いのといったようなことであるとかいうこともありました。

お化粧という問題でも、あるとき宝塚市でフェスティバルをしたときにやったのは、ドラッグクィーンのトップの方もおいでました。お化粧なんですけど、真っ黒に炭を塗ります。そうすると、女性が普通になさっている化粧をするだけでも男たちにとってはかなり強烈かもしれないんですけど、真っ黒けにするような形の化粧をしてスカートをはく。そのときは午前中の分科会でそういうものをやりまして、ちょうど化粧をしてスカートもはいてという、そういう姿に変身する完成品が出来上がった頃がお昼休みでした。お弁当みたいなものを持ってきてる人はその施設の中で食事できたんですけど、中に食堂もありませんので、お昼食べるために何かを買い出しに行くとか、外のレストランに入るとかいうことをしなければならなかった。

それで、多くの人たちはせっかく化粧したばかりなのにすぐ落としてしまいました。何人か勇気を奮って飛び出していきました。そうすると随分違う見え方をしたようです。普段そういったものに対して見る側でしかいなかった男たちが見られる側に回ったんです。そこで見られる快感に目覚めた人もいらっしゃるし、いろいろということでもあります。

私たちかなり好き勝手なことをしてきました。あるときドーンセンターで開催したときなどは、1人1人にバラの花1輪ずつお渡ししました。2日間のイベントなので、「2日間それを大事にしてくださいね」。そうすると男たち困りまして、しかもその日1日だけやったらまだしも2日間にわたります。お花と男というようなつながりを問い直してみました。そしたら、女性に対してプレゼント攻勢でお花をプレゼントして云々という使い方をしたことがあるかもしれないけれど、自分自身のためのお花というような形のものを経験してもらった。そんなことも1つの経験した日になった。そのとき取材に来てくれた某新聞社の記者が、後日こう言いました。その方は単身赴任なんです。そういう経験から、単身の住まいの部屋にお花を生けるということをやりました。単に取材に来てだけの人なんですけど、そういう1つの進歩があった。

あるいは宝塚でしたときですと、当初思ったのは宝塚歌劇の町ですから、女性が男性の役をなさってますね。歌舞伎だったら、男性が女性の役をなさってますね。宝塚ですから、逆に女性だけで男役の人たちがいる。その男役の人たちに、男を見せる、男だぞということをどういう形で示すのか。それは、ああいう演劇の世界ですからちょっと特殊ではあるんだけど、そういう話を聞くことも男を考えることのヒントになるんじゃないかと思ったんですが、ただ、それはちょっと民間でしている私たちにとってはお金の問題が伴いましてなかなか実現できませんでした。その代わりとっては何ですけども、そのときは参加証としてスカーフの代わりになるような布きれをみんなにプレゼントしまして、2日間その布きれを身につけてください。それが参加証の代わりですということをやりました。参加している女性たちは普段のノリでそれをあしらっていきます。男たちはすごく戸惑います。そういったことと言えば、とことん化粧したりすることまでは別としても、身だしなみに気を配るといったことと言えば、別に男性女性問わず必要なことなので、せめてそのレベルまではと。あるいは男性の皆さんで、女性だったら小さな手鏡を持ち歩くでしょうけど、男はどうなんだろうとか、そんな問い直しをしたりしながら男の問題をしています。

ちょっと相談の方に戻りますと、女性相談の枠で考えますといろんなところでしんどい思いをしている、被害者として認識できそうな女性たちへの支援というのが相談事業としてあると思うんですが、男性の場合非常に難しいと思っているのは、そういう社会の中で傷ついた。あるいは両方共通しますけど、うつの中でしんどい思いをしているそういう人たちへのサポートという意味の相談であれば、男性相談も女性相談も同じだと思うんです。

だけど問題なのは、加害行為のことが含まれますよね。DV のケースだったら。女性相談だったら被害者としての女性、それに対してどうサポートしていくの。支えてあげるのという意識の中での相談のかかわりですよ。それに対して男性の場合、どうなんでしょうか。その加害者である男性にどう向かうか。当然かけてきた男性は、最初から「それは駄目ですよ、駄目ですよ」なんて言いまくりますと、電話だとブツンと切ってしまいますよね。それでは駄目なんで、一定彼を受け入れつつでもそこから変わっていくための手だてをしていかないといけない。そうすると、最初は別にこちらとしてはその人のことを肯定してるわけじゃないんだけど、かけた男性にとっては自分のことを肯定してくれたという認識の中で、そのレベルで電話を切ってしまったとしたら、自分の方が正しいという認識で終わってしまう。わずかな時間でもつながる中で、せめて最後電話が切れるまでの間に、そこまで深めていくための作業みたいなのところがあって、それが非常に難しいなと思っています。

そういう意味で、DV ケースの場合には特にやっぱり面談、大阪市の場合ですと面談もやっていますので、もう電話で続けていくんじゃなくて面談の方に切り替えてもらう形、そこでの受け皿に切り替えてしまってじっくりと向かい合うということにしなければならないという気はしてるんですけども、最初の入口で言えば電話ということになります。

よくあります。しかも男性でかけてきたときにありますのは、最近時々、DV というものがある程度浸透してきましたから、自分がしていることがそのDVの加害の方になるんでしょうかということを一意識して電話をかけてくる人もいらっしゃいます。それは随分社会は変わってきたなと思います。以前ですと、自分の方が被害者という認識しかありません。ただ、非常に難しいケースがあって、自分は男性なんですけど、女性の側からDVを受けてるとするような認識の中で電話をしてくる。おっしゃっている1つ1つのケースだけ見ると、確かにDV被害を受けている女性たちと状況が似ていて、それってDVと言えるかもしれないぞと思うケースです。そしたら、即被害者である男性にどう寄り添うかということに切り替えてしまうと気になることがありました。本当にそうかもしれないけれど、でもそのもっと奥底の中に実はその男性の側の問題があって、むしろその裏返しの中でそういうことになっているかもしれない。単純に被害というレベルだけで終わらなかつたりする。その辺の見極めみたいなことも1つあるかもしれません。

それともう1つ男たちは、これはDV というものがものすごい世間で言われ出す前の相談なので、少しケースとしてはずれたようになるかもしれませんが、なかなか理解できないという部分がありました。ちょっと単純化して言ってしまうと、ある日家に戻られますと妻が家を出てしまっていた。自分はちゃんと給料も入れているしとか、いろいろ言うわけです。確かに問題行動に見えないことをおっしゃるわけです。そしたら、なぜ妻はということなんです。いろいろやり取りしながら、その方のフォローをしていく中で、ああそういえば、あのとき手をあげてしまったということに気づくことがあります。多分、それが1回きりのことじゃなくて繰り返されていた。1回だけでも、男性は思い出した。そういったことが1つ背景にあるんだということ、じんわりじんわり認識していただく必要がある。

こんなケースもありました。女性が長い長い書き置きを置いて家を出られました。電話をしてきたその方が、夫婦げんかをしたはずみで妻が家を出てしまった。それから音信が取れなくなった。ある日突然裁判所からというようなケースですが、女性の側でDVの被害届を出されて介入が始まったんです。接見禁止とか、そういうことでの呼び出しとか、そういったことがありました。けんかして飛び出ただけなのにどうしてこんなことになってということをおっしゃる中で相談が始まりました。

そのときにじんわりじんわりと見ていきますと、私がそのとき思ったのは、その長い長い手紙の中にこんなことを書いてました。生活のことを細かく細かく書いておりました。その方が例えば借家住まいとしますと、月の何日頃に何とか銀行の何とかいう口座に家賃を振り込んでくださいねとか、あなたのパンツはこのタンスの何段目のどの引き出しに入ってますよとか、こと細かく書いてある書き置きでした。客観的に言えば、夫婦げんかの揚げ句、そのはずみで飛び出したのであればそんなに長い書き置きを書くわけがない。やっぱりそれなりの覚悟があって、飛び出すきっかけとしてはそれがあつたかもしれない。でも何かあればという気持ちの中でそういう整理をして、あるいはそれでもやっぱり夫に

対してあれこれ伝えておかねばならないという義務感みたいなことを含めて書かれたもの。そういったことになかなか男たちが、そういう現実を見ても見えづらかった。それを少しずつ少しずつその方の中に落とし込んでいくというのか、気づいていく。そしたら、自分としてどうすればいいのか。何をすればいいのかということになります。

それで、非常に電話相談で残念に思うのは、男性の気づきあまりにも遅すぎて接見禁止とかそういったものが出てしまってからになってしまうと、それは拘束力がありますし、どんなにしたって、会いたい会いたい言われてもつなぎようがないじゃないですか。そうじゃない前に気づけて、もう一度向かい合うチャンスというものをつくれたらと思うんだけれども、その段階ではなかなか気づけていなかったりするということがあります。

大阪市のケースで、ある意味私たちの民間でやっているものは男性相手の相談ということに特化していますけれど、行政枠の中での相談というのは男性相談という枠は男性のみかもしれないけれど、当然女性相談はある。そうすると、非常にその部分のメリットみたいなものは私はものすごい感じてます。と言いますのは、まず男性相談発ということじゃなくて、女性相談発になってしまうことが多いですけど、まず女性が相談に来られて諸々のこと、例えばDVならDVでもいいですけど、いろんなことが見えてきて、DVなんだけど即別れるという決断ではなくて、彼が心を入れ替えてくれるならばもう一度やり直したいというような気持ちを残されていたときに、その男性の側が相談窓口まで足を運ぶ気持ちがあるのであればということで、女性相談のスタッフから男性相談のスタッフの方に連絡が入って、こういう人がいるんだけど紹介してもいいかどうかということから始まって、そしたら紹介しますからこういう方が来られたらよろしくね。女性相談の方では女性に対してきちっとフォロー、寄り添っていく。男性相談の方では、その男性に寄り添っていくということ。そしてそれぞれの相談員同士がきちっと状況を伝え合って、あるいはその2人だけでなく、もう少し広い相談員の中でこのケースどうしていったらいいかというようなことも合わせて問いかけながら、それぞれにかかわっていく。そういうのが非常に有効な手段であるかもしれないということ。

ただ、先ほど言いましたように男性相談というものを安易にすることの難しさみたいなものを言いますと、加害ということがありますよね。電話相談だけであれば、どこで電話をしていようと別にさほど問題ないと思ってるんですけど、例えばDV被害者である女性がしょっちゅう出入りする施設の中で男性相談をするときの難しさというのは、その電話だけだったら別にいいんですけど、例えば面談も含めた相談をしたりすると、同じ施設でしているとそこに出入りをするようになります。そういったときの双方に対する気配り、あるいは危機管理的なというんでしょうか、いうあたりをどうしていくのかということも合わせて考えていかねばならないこととしてあります。

でも一方で言えば、男女共同参画の行政としての施策的に言えば、双方に向かって相談があることはものすごいプラスになると思ってます。その相談、面談というものを含めてするとしたときにその場所をどうするのかとか、その被害女性を守るためのいろんな手だ

てみたいものをどう講じていけるのかとかいうあたりが1つ問題がありますし、また相談員に誰を頼むのかということもあります。先ほど言いましたように、古い価値観に凝り固まった相談員であれば、またとんでもない方向に走るかもしれないという意味でも、この男女共同参画というベースの中で見つめていく相談ということにおいて言えば、そこをきちっとしておく必要があるんじゃないかなという気はしています。そういう中で、電話相談というものを考えてまいります。

今日長い時間なので、ここで10分ほど休憩をさせていただいて、3時から再びスタートということにさせていただきます。ちょっと長い時間なので、トイレ休憩を含めましてよろしくをお願いします。

(休憩)

それでは、また始めたいと思います。少し電話相談と離れつつ、離れたりくつついたりしながらの話を続けていきたいと思ってるんですけども、先ほど大阪市の男性相談にかかわって、現在は豊中のすてっぷというところに行きましたので、なかなか時間が取れなくて、男性相談の現場は私の住まいしてます大阪茨木市のセンターの部分だけなんです。ちょっと自分が行くことができないので、仲間うちで信頼できる人を代わりにメンバーとして送り込んでいるという状態ですけれども、大阪市のセンターで1つすごいなと思ったのは、「男のフェスティバル」を開いた後にクレオ大阪中央の、財団法人ですけども、財団に出向していた市の職員さんで、財団で言えば事業課長をしていた人が訪ねてきて、相談事業を始めたい。それは、本来的にはクレオあるいは財団としてではなくて、大阪市の男女共同参画課が担当課としてということで、まだ予算処置が確定する前の段階からでした。

人手不足という話なんですけど、そのときその男性の課長から言われたのは週2回、電話相談と面談と2本立てで開催をしたい。そういったものにかかわってきた私どもからすると非常に魅力的な話です。それだけ時間数が増えるということは、まだまだそういう男性相談ということをしている相談事業がまだ数少ない中で、それだけ層の厚い形でしてくれることがいいなと思ったんです。ただ、そのときにあなたたちの仲間で相談員を確保してほしいと言われたときに、もともと先ほど言いましたように「男悩みホットライン」という相談事業してますよね。そこに当然人手は要るじゃないですか。それプラスあと2日分、大阪市の場合は毎週2回ずつということなので、そうするといくら複数の人間を抱えていたとしても、またそれを相談員だけで仕事としてできるかというところでもないだけで、時間を割けるかと非常に難しくなって、非常に残念だったんですけど週1回でごめんなさいということにしました。

そういう意味で、もっと相談員としてかかわれる人材をどう育てていくかというのはこの分野、特に男性相談を男性が担うという場合のケースということですけど、その相談員

となる男性をどう育てていくかということが大きな課題としてあります。比較的層が厚かった関西ですらそうですし、関西エリアに幾つかあるそういった市が出てきました、したいという人が。そうすると、私たちの中のメンバーにお誘いが来ることが多いんですけども、どうもなかなかそうはいかない。結局、そういう志を持っていただいたにもかかわらず実現できていないということがあります。それが実現できるような環境になれば非常に嬉しいと思います。

先ほど自分たちでやった相談が初回から結構反応ありましたという話をしましたけれども、大阪市の場合もそれでした。びっくりしました。電話相談は確かに事前告知があれば、その時間帯に電話をかけてくるということは可能です。面談も同時にスタートさせましたけど、面談は事前申込制にしたんです。しかも週1でしか私たちメンバーが待機しないという形ですので、少なくとも1週間前に電話予約をしてくれないと入らないはずの面談だったんです。初回、電話がかかってきて、今すぐにでも行きたいからもし空いてるんだったらさせてほしいと言われて、初回から面談もフルでした。2時間枠でしてましたので、電話で30分と考えますと4人ですね。面談は30分というわけにいかないから一応1時間ぐらいを1つのベースに考えながら、電話予約という形をしますので、特に面談の場合は1時間という限定にして、その積み重ねでさせてもらってます。電話の場合はその電話を受けた段階で、時間はその状況次第ですが、切れた段階でまた電話がかかってきたら受けるという形になります。「男悩みホットライン」も大阪市の場合、結構何回かけても話し中というケースがやっぱり多いみたいです。それだけ求めている人たちがたくさんいらっしゃる。まだまだそういう相談窓口を開いているところがまだ少ないというのが現状です。

私の場合、そういった面談という形、私たちとしても自分たちがしていたのも電話だけだったんです。面談というのを入れることで、自分たちの勉強にもなりました。特に気をつけたのは面談をする相談員を誰にするかといったときに、やっぱりきちっと心理のことを学んでいる人でなければ困るということで、臨床心理士であるとか産業カウンセラーの資格をきちっと持って、しかも経験のある程度積んだ人という形を取らせていただきました。それと、女性相談もそうですけどやっぱり日々の相談だけで終わるんじゃなくて、そのかかわっている人たちがどれだけその後も研修を重ねるかというのか、スーパービジョンとよく言いますが、抱えたケースがほんとにそれで良かったのかという検証みたいなことをする時間と言いますか、そういったものをどうつくっていくかということも大事だと思っています。

民間でやっております「男悩みホットライン」の場合は、現在月曜日の3回ほどを充てていて、月4回あるとしたらその後の1日をそういう研修に充ててます。何かテーマを決めてする場合もあれば、それまであったケースの中でこれはみんなでも共有しておいた方がいいなとか、こういう対応をしたんだけどそれで良かったんだろうかと思っているものについて、そのメンバーの中でいろいろチェックしていくとか、そしてもう1つはスーパー

バイザーというプロ級のプロに絡んでもらうことによって、その専門家の目で見てもう一度きちっと押さえていくという作業、そんなことも合わせてやってきているということでもあります。その辺ではあまり民間でやってるからとか、安易にできてしまっているということじゃなくて、そういった研修みたいなことも大切にしているということがあります。

ちょっと今心配していますのが静岡のケースです。当初お話し運転的に、男性相談というものの市場調査的なことと言いましょか、ある年の夏に、2004年の夏ぐらいに私に対して4回ほど静岡へ来てください。午後1時ぐらいから夜の8時まで、4回ですね、私は電話の前に座り続けました。つながった人たちに電話相談という形でかわりをしていました。そのときかなり丁寧な記録を作りました。それを残しておいてこれからどうするかということ、県の施設で「あざれあ」と言われている施設があります。そこでやりました。でも、いろいろ仕掛けたいのはその「あざれあ」というよりは、本庁の県の方なんです。県の男女共同参画課の方なんです、が、「あざれあ」としては1回集中的にやってみました。それをもうちょっとじっくりと検証しながら、どういう形がいいのかということを見据えていきたいと思っていたんですけども、県の本庁の方は、即来年の4月からやりなさいということで強い要請がありまして、「あざれあ」としても踏み切らざるを得ない。両方とも一体のようなものですから、特に本庁の方でそういう方針を出せば動かざるを得ないということがありますけれども。

例えば関西にいる私なり他のメンバーが、その度その度に行くのは大変じゃないですか。向こうも経費を含めて大変ですよ。それで地元の人でそういうことをしてくれる人ということで探してあげました。結果的に言えば、学校の先生の退職者で性教育にかかわってきた方がいらっしやいまして、その方だったら問題行動もなく、きちっと対応していただけるだろうということで、その方とプラスアルファという形でスタートいたしました。人物的に、後日私も会いましたけれども、非常にきちとした方でしかも研究熱心な方なので、自分足らずを学んでいく。また、きちっと心理の勉強もなさっていくという形で今やられているんですけども、そこで気になっていたのがスーパーバイザーという形で、そういう形のものまではいかなかったとしてもきちっとそういう研修の場というものが大切なんだろう。実際そうなんだと思いますけど、そういった学びをしつつ、また自分たちの意義を高めつつという側面があると思います。男女相談について、特にまだ始まったばかりである男性相談であればあるほどその辺も大切だろうと思っています。

幸いにして、静岡県の場合毎年、回数としては非常に少ないんですけども研修というのはされるということになりました。実際に相談にかかわってくれている人たちの研さんの場であり、これからまた新しくしたいと思っている人たちの学びの場である、両方を兼ね備えた地。細々とやってたんですけども、毎年繰り返すことの非常に大切さみたいなものを認識してたんですけど、実は今企画行政予算減の時代ですよ、削られて消えてしまいました。しかも、これまで深くかかわって来てくれた人が転任してしまいました。新しい人が来てるわけで、その前の事情を分からない人が新しく来られたので、

これを復活できるかどうか非常に心もとないです。ただ、もうほんとはそういったものをきちっとしていく必要がある。そしてもっと言えば、男性相談をかかえているところで個々にできればベストなんですけど、それできない場合にもうちょっと広域の中でどこかが主導する形で、関係のいろんな人を集めてするような形というのも大切なんだろうという気はしています。

静岡の場合も県が最初にスタートしまして、あと幾つかの市で、静岡市も含めてスタートを切ってます。そしてその研修というのは、実際の現場を抱えた市の場合はその相談員の方々が必ず参加する形になっています。そして新たな学びという、0からの学びみたいな人もいらっしゃるの、その人たちにもメッセージもあるんですけども、実際にあったケース、ケースカンファレンスと言いますか、いう形のをきちっとしていく場もあるというものがあります。そういったものをどうしていくかということも大きな課題かな。

実際に相談窓口をつくるということもハードルが高いんですけども、それを維持するためにそれにかかわっている人たちの質を向上させていくためのそういった部分と言いますか、そういったものも非常に難しいなという気はしております。

ちょっと脱線気味になっていきますけども、DV のケースでこう思ってます。関西であるグループが、電話相談とは別枠の中でワークショップ形式でDV のカウンセリングの代わりになるものを始めました。アメリカでも結構あります。日本でも、東京で言えばアウェアの山口さんが、最近デートDV の方にちょっと軸足が大きいかもしれせんけれども、男性加害者に対してワークという形で学んでもらう仕掛けをなさってます。同じようなことを関西でもやり始めました。

そのときに、電話相談もそうなんですけど、ちょっと非常に気掛かりなことも幾つかあります。それは男女共同参画目線でどうフォローしていけるのかということにもつながるんですけども、先ほども電話のケースでも言いましたけれども、被害者としての問題だったらまだしも、その加害者に対してどこまでそういう目線を入れ込む形でカバーしきれるかということと、電話相談あるいは面談というものとそういったワークの比重ですよ、それがちょっと気になってます。あなた、DV 加害者ですよと言われた男たちが真っ先に走るのはどこだと思えます。電話相談とか面談じゃなくて、ワークなんです。ワークが手軽と思ってしまうんです。アメリカなんかのように40週とか50週にまたがるものであったとしても、まだそれの方が自分の方が楽チンと思ってしまうというのと、もう1つ電話とか面談でその方の心の部分をきちっと詰めていく形でフォローしていく、そういう相談事業の部分との違いで言えば、ワークの場合、表面的によく分かりにくいですね。今裁判になっている自分を有利にするために、こういうワークを受けているということを証明したい。あるいは自分は一定乗り越えたぞと言ってしまいたいということです。

実は関西の面談の中でもものすごく気になることがありました。あるとき、自分自身も加害者だった人がその方の自覚としてなんですけど、自分は乗り越えた、暴力を振るわない男に生まれ変わった自分ということで、このワークショップというのは非常にいいですよ

ということをおの人に伝えたいと思っている男性がいらっしゃる。けれど、その方がほんとに暴力を振るわない人間になったのかどうかというのは、ご自身の判断でそう思っているけれども、周りから見たらどうか分からないですね。あるいは妻から見たって分からない。元の妻か妻かは別として、その方から見ても分からない。もっと言えば、アメリカのそういったワークにかかわっている人たちもおっしゃるんだけど、被害を受け続けた妻から見て、あの人はほんとに変わったよと言える状態までなっていれば本物かもしれない。客観的に見るだけでは十分分からないとおっしゃっています。ましてやご自身の判断だけでは分からない。でも、彼は自分は乗り越えたと思っっている。

そのときに余計なことを言ってしまったんです。自分は変わったのに、その変わった自分を妻は認めてくれない。そのときに電話相談でも面談でも共通するんですけど、私はこう思っています。DV 被害というものがあつた。そのときに被害者の立場と加害者の立場で随分違うという温度差というか、その状況、被害者の側に重いものがあるということなんですけれども、単純に言えば、例えば満員電車に乗っていた。激しい揺れの中で、ある人がある人の足を踏んだとします。その踏んだ側って確かにそのときは意識があるかもしれないけど、すぐ消えてしまうじゃないですか。でも、踏まれた側ってずっと残りますよね。ということは、DV というケースがあつて、被害を受けた人がそこから抜け出してしっかりと前に向かって進んで行くにはものすごい時間がかかりますよね。でも加害の側は、それをスカッと忘れてしまうかもしれない。

先ほども電話のところで少し話しましたが、自分は悪いことしてないのにとか、ちゃんと給料も入れてるしという認識でしかなかったりするという事案があります。そうすると、さっきのケースで言っても、彼がもしほんとに変わっていたとしても、その変わったということをおの被害を受け続けてきた人がきちっと「そうだよね」と言えるまでに、彼女自身の傷が癒えるのに時間がかかるから。しかもその時間差みたいなものがあるということをお分かつたうえで、ワークを指導してほしいなと思うわけです。そういったことについても、またそれも相談事業と言われている枠の中の方がきちっとフォローしやすいのかなという気もしています。私のところにもよく個人的にも電話がかかってくる、そのワークショップを受けたいんだけどどこへ言えばいいですかという話があります。紹介するのは簡単なんだけれど、その前に1回カウンセリングを受けてみませんかというように誘導するようにしています。やっぱりそれの方が、私は有効だと思っっています。

ただ、これは両方をうまく使い分けるといふか、両方をうまく生かし合つた形で乗り越えてもらえたら嬉しいなということでもありますし、ただ、皆さんも言わずもがなかもしれませんけど、DV の加害者として身につけてしまったものはそうたやすく脱ぎ捨てられないということがあります。私もよく思い出すんですけど、カナダの女性からこう言われたことがあります。アメリカのケースも含めて、そのワークショップ形式の研修、脱暴力のプログラムを受けている人たちがいて、でも結局元のもくあみといふのか、暴力を振るい続けている人たちがいて、ちゃんと乗り越えられる人の比率って非常に低いですよといふ

話がありますよね。その中で、その女性は、でもそういう病気に例えれば治癒率というんですかね、いうものが低かったとしても、病気と考えない方がいいと思うんですけれども、そういうものが必要なんですよということを言われたことがあります。

元のもくあみというか、それを受けた後も暴力を振るってしまう男性であったとしても、そのプログラムを受けている期間というものは比較的安定してます。暴力行為が激しくならない。そうすると、普段暴力行為が高じてどんどん加速している中でいえば、被害女性はそれだけで縛られてしまってどうしようこうしようという思案というか、どうしていくかという計画とか、そういったことがなかなか整理できない。例えば相談の窓口へ行って相談しながら、こうしたらいいですよというやり取りをしていく作業もなかなかはかどらないかもしれない。でも、その暴力行為が静かに収まっている期間が一定期間あれば、その間にこのまましなくなってくれたらラッキーだし、もしまた暴力振るわれたとしたら、今度はそのときはどうしようこうしよう、例えばどこそこのシェルターへ逃げようか、まずは相談の機関に足を運ぼうとか、それなりの自分なりのイメージ、手順みたいなものが、その間にその方にとって一番ベストと思う姿、ものを見つめる時間として用意できたとしたら、もし夫が変わらなかったとしても、その通り動いていけばいい話だと思うんです。

もう1つ、アメリカのマサチューセッツ州でそういう男性加害者に対する脱暴力プログラムを実施しているメンバーからちょっとお話を聞きましたけれども、その方々は決して男たちを変えようと思ってしてるわけではないという言い方をしました。そのDV被害者を救済するということの取り組みの中の一環である。幸いにして、そのプログラムを受けたことによって変わってくれたらラッキーだということ、そういうものを引き受けるための自分たちにとって最低限これこれということ言えば、もしその男性を受け入れてそのワークをしているさなかに、彼が暴力行為をしたとします。そのときに、その女性を安全に逃がせるということを自分たちが責任を持てるということでない限り無理だ、すべきじゃないという言い方をなさってました。それって非常に大事なことだなと思いました。

すてっぶで言いますと、もう皆さんもご存じですよ、初代の館長が裁判を起こしていたということご存じですか。3月末に高裁判決が出まして、前の館長さんが勝訴しました。地裁の場合は逆だったんです。そのときに、当然マスコミは格好のネタとしてニュース報道しようとしています。某テレビ局からこういう電話が入りました。すてっぶの中を撮影させてほしい。私は、断固拒否しました。なぜ拒否したのか。それは講座を受講しますというレベルであったら問題ないかもしれませんが、中に相談室がある。相談室に出入りする女性たち、当然そこに来てることを知られたくないとか、いろんな条件の中で匿名性を大切にしなければならぬと思って来ている人たちがたくさん出入りします。テレビカメラが入るということは、その人を映してしまう可能性があります。そんな危険なことできるかいなということです。当然相談者の安全を守ることが大切ということ考えたときに、取材拒否をしました。

そしたら、市役所の広報広聴課の方にそのテレビ局がクレームをつけました。けしから

ん、そっちからもう1回言うてくれという感じでしょうかね。一応電話で話したんですけど、その市の広報広聴課の人も事情を分かってくれていて、それはそういう意図ですよ、とりあえずちょっと妥協策だけ考えようかということ、出入りしている人たちの顔を映さないという条件を守るのであれば映してもいいですということにしました。でも実際にそんなことはできないですし、またそんな映像を流したって意味ないでしょうから、結局は来ませんでしたけど。やっぱりこういう施設というのはそういった、例えばDVの被害者だったとしたら夫に知られたくないとかいろんな、その内容はいろいろあって、そういうことを抱えている形で来ているじゃないですか。そしたら、その人たちを守ることが大切であって、それが守れないということはそういう施設を預かっている者として非常に恥ずかしい話だし、そういうことが出てしまうと、そういった人たちからの信頼を失うことにもなります。それで、ご相談というのは非常に難しいなと思ってます。それ故にちょっと加害者と被害者との絡んだ中で、非常に保護しなければならないという形にもつながってのこととご理解いただければいいと思います。

それともう1つ、相談からは離れるんですけど、相談と密着していると思ってますが、デートDVの話です。大人バージョンのDVについては一定進みました。まだまだ不十分かもしれないんですけど、それなりに支援する相談窓口を含めて進んでまいりました。法律的にもまだ正確にはデートDVの範疇は含まれてませんよね。それを拡大解釈するにしても、どうしていくかということがあります。すてっぷにおいても今非常に大事に思ってますのは、デートDVという若い世代に対してもきちっと対応していく。相談に乗ってあげる。そのときにその当事者だけじゃなくて、先生方であったり親御さんであったりの悩みみたいなものも含めて受け止めていくということが必要だろうし、またそういうDVというものは問題なんですよということをそういう世代に対してもしていかなければならないことだと思ってます。

もう1つ言えますのは、中学生ぐらいになってデートDVが発生しているとしたら、その年代では既にいえば男はかくあるべし女はこうだというようなものが刷り込まれてしまったために、女性の中学生も嫌と思いつつも言えなかったりすることにつながっていくわけです。でも、そういうかわりって駄目だよということをもっと幼い頃から学びとるということも大切だろうと思ってます。その部分というのは、男性女性を問わずだと思うんです。むしろ思ってますのは小学校へ上がる前、幼稚園・保育園時代、あるいはもっと幼くてもいい。とりあえずその年齢に応じた形でいいから、パワーアンドコントロールというような形でものごとを解決するのはけしからんことなんだ。そんなことをしないで、もっと違う方法だってあるでしょうということを学びとって、あるいは違う方法というものをその年齢なりに学びとっていくような形。

逆のような形で、その被害から自分を守るということもさることながら、加害行為をしないということも含めて、あるいはそういう人間関係的な対応の仕方というものを学びとっていくようなものというのを合わせてしていく必要があるかもしれないという気がして

ます。ですから、デート DV が顕在化する年齢の前の段階できちっとそれを入れておけば、男の子も変な形でかかわりをする、全部にはならないかもしれないけど、ちょっと気づくことがあるだろう。あるいは女性の側も何か嫌なことをされたときに、それってやっぱり問題なんやという認識のもとに動けるような形というものが大切だろうと思います。

そして相談にしろワークにしろなんですけども、やっぱりそのデート DV でも思いますのは、DV の中身もそうです、私たち一般の人たち、そういうことをあまり理解していない人たちに伝えるときに、殴るとか蹴るとかということがあれば問題ですよということはまだ伝わりやすいですね。でも精神的にとかいった部分について、なかなか伝わりにくいところがあると思ってます。そういったものをどういう形でみんなの認識にしていくかということだし。

私、今幾つかの大学で非常勤しているわけですけど、ジェンダー論という形の授業をしていますけど、最後の試験をしないでレポート課題にするんですけども、私のレポート課題の1つに「恋愛をめぐるジェンダー」というものがあります。恋愛というのは若い世代にとっては非常に関心が高いということで、それをテーマにしてジェンダー目線でどう見えるかというのを、性的マイノリティの人たちにとっての恋愛とかいろんな切り口があると思うんですけど、その中の1つにデート DV という問題が含まれていると思ってます。

あるとき、非常に貴重なレポートを書ってくれた学生さんがいました。決して殴る、蹴るという暴力を受けてたわけじゃない。むしろ行動を縛るという形でした。例えば、彼が電話を入れたときにちゃんと電話に出る。メールを入れたときに即返事を返すことを彼は求めた。でも、逆はどうでもいいわけです。自分はそうしないくせに相手には求める。そして、例えばそれをできなかったときに糾弾していく。その女性が言っていたのは、例えば電車に乗っていてとか、喫茶店に入っていて友達とおしゃべりしていた。その喫茶店だって、もし地下があつたら電波が届かなかったです。そのときに、これから電車に乗りますとか、ちょっと友達と会ってからしばらく喫茶店にいますとか、喫茶店は地下なので電話に出れませんとか、そんなこといちいちいわないと許されなかった。

それとか、一緒に暮らしていたわけではないとは思うんですけど、暮らしていたかもしれないんですけど、夜寝るときに、今日しんどいからシャワーだけで済まそうと思ったり、もうシャワーでもいいやと思ってしまう日があったりするじゃないですか、そのときに彼は必ず風呂につかることとか、そんなことを制約に入れてるわけです。そのとき、最初は親でも何でもないのでそんなこと言われたくないわという気持ちが残っていたとしても、だんだんだんだんそのうちにそれが当たり前のようになってしまう。関係をどんどん絶たれていってしまうために、一方的にその男性の情報しか入ってこないから、男性情報が唯一だし、唯一絶対のものに見えてしまって、例えば監禁されているとかいうことではないんだけど、すべてを縛られている。自分の意思で何かじゃなくて、すべては彼の意思のもとに動かされてしまっている。

そういった関係から少し離れて生きていく作業になったわけですけど、それが一定進ん

だときに思ったのは、自分の中に自分が戻ってこれた。その肉体と精神と言いましょか、どうするこうするといった意思表示みたいなものが、肉体は彼女のものかもしれないけれど、そのすべての指令塔は彼の側にあってその通り動いていたのが、やっと自分の意思でどうするこうするということ判断できるようになったというようなことを書いた学生さんがいて、それはすごく大事なこと。また一見何でもないように、例えばきちきちっと連絡し合うこととか、一見正しそうに見えながら、実はいろんな縛りにつながっていくようなものってあるな。そういったことでなかなか世間には認知しえてなく、そういったもの問題性みたいなものをどうあぶり出していくか。また、その年代にどう伝えていくかということに対して難しきみたいなものを学びました。

またもう1つ、DV で言えばこんなことを言った女子学生がいます。彼女は3年生で、彼が1年生でした。新しく新入生で入ってきた彼、そして自分の所属しているクラブに入ってきた彼。彼には既に付き合っている彼女がいました。でも、その3年生の彼女が見たときにどうしても付き合いたい相手でした。だんだんと彼女はアクションを起こしていくわけです。そして、彼は結局付き合っていた彼女と別れて、彼女と付き合うことになりました。いけば、3年生の彼女からしたら、ちゃんと自分の思い通りになってプラスプラス、ラッキーラッキーのはずなんです。でも、ふと気づいたんです。ものすごくしんどくなっている私がありました。

なぜかという、こうです。自分の方に目を向けてほしい。今付き合っている彼女と別れてほしいという気持ちの中で、誘いをかけていたりするわけです。そのときに、普通そういう関係でなければ、それは私は嫌よとはっきり言う内容の行為を、どうしても自分の方になびいてほしいために許してしまっていた自分がいた。そうすると、彼の側からすれば、それは許されることと思ってしまう。でも彼女にしたら、ほんとは嫌なのよというものですよね。それが繰り返されると彼女はしんどくなるし、彼の側からすると最初は許されているわけだから、それは彼女がちゃんと受け入れてくれてることと思ってしまう。そこにこのデートDVにつながる大きな穴があるような気がします。そういう意味では、非常にささいなことというようなことがあると思います。その辺をどこまでしていっていいのかなということをおもいます。

それともう1つ、これは電話相談とか相談事業だけにかかわらず、男たちの習性というのか、問題性としてなかなか自己開示力が乏しいということがあります。それをどう乗り越えていくのかということも大きな課題かなと思ってます。メンズリブという市民活動をしていて思いました。やはり、なかなか自分をきちんと伝えるということを苦手とする部分が多分にある。あるいは自己評価が低すぎる。例えばマイナス思考をしてしまっているというんでしょうか、誰か相手のことをどう評価するかというときに、相手の欠点ばかりまず追いかけていく。相手の長所をまず見るんじゃなくて、短所を見てしまう。それは相手をそう見るというだけじゃなくて、自分に対しても自分の欠点みたいなものばかりが目についてしまって畏縮してしまうというんでしょうか。自己尊重感がちょっと弱いような

気がしています。それとまた、きちっと話せなかつたりする。

だから幼い頃から、ちょっと単純化しすぎた話にしてしまうとすればこういうことです。「あなた男の子でしょ」という育ちをするということはどういうことかという、そういった豊かな感情とか感情表現というものを奪うことになってしまう。例えば、私たちが随分前ですけど幼い頃の体験を語り合ったことがあります。そしたら、みんな共通項で同じ体験をしてました。いろんな地域の人たちがいますから、そのお国なまりの言えばいろいろあったんですけど、こういうことです。幼い頃に、転んで泣いていた。通りかかった大人が、それはご近所の誰それさんです、そのときにどんな声がけをしたかという「ぼく、男の子でしょ」という問いかけを行った。それは、転んでいる子が男なのか女なのかという性別を聞いたわけじゃなくて、男が転んで泣いていることを分かったうえで「男の子でしょ」ということは違うメッセージですよ。男の子なんだからそんなことでめめめしなさんとか、泣きやみなさい、泣きやませようとするための声がけです。そうすると、男の子はこういうとき泣いたら駄目なんだと思ってしまう。そういう形で感情に蓋をするということを学んでしまう。そうすると、いざ感情をきちっと出さねばならないときに出せなくなってしまうという。

それが、例えばさっき言った電話相談で、女性からの電話と男性からの電話の違いにもつながっていくと思います。なかなか自分をさらさない。あるいはさらさないで有益情報を得られたらラッキーと思ってしまうような部分につながっているような気がしてるんですけども、男の子でしょ、男だからこうあるべきですねということを学んでいく過程が、気持ち・感情に蓋をするということの学びになってしまう。しかも、その中で唯一許されている感情みたいなものが怒り。怒りの方は比較的許されている。よりたちが悪いということなんですけど、あるいは男の子は幼い頃にやんちゃ盛りの子供たち、それを是とする目線ってありませんかね。最近はちょっと変わってきたかもしれません。私たちの幼い頃の、例えば小学校時代、学校で悪さをする子がいた。その子を逆に教師は誉めてたりしかねない。

実は、さっき「たっちゃん」と言ってたのは、それにもものすごく違和感を感じていた人です。男の子が女の子をいじめたり、ちょっかいを出したりすることを是とする。あるいは男同士でも同じことなんですけど、誰かに自分の我を押しつけることで相手をコントロールするようなことに長けていたら、それをプラスの知恵という形で認めているような目線でしていくことの是非みたいなことが多分にありそうな気がしてます。それをどういう形で学んでいくのか。学びごととしていくというんでしょうか、いうことも大切なんじゃないか。

それからもう1つ言えば、男の子はこうだ、女の子はこうだというワンパターン化したものを世の中に置くんじゃなくて、例えば力強さみたいなものを男の範疇のプラスに見て、心優しさみたいなものを女の側の範疇に入れてじゃなくて、男だって女だって力強くまた心優しく、両方を持ってなければ駄目でしょうというような形の認識みたいなものを幼い頃

からきちっと入れ込むことが大切なんじゃないか。性別によって違う対応を求めるんじゃないで、どちらにもある感情であったり、どちらにもある気持ちというものを大切にしてい。強くもあれば優しさもあるという、そういうものをどう強調していくかと思っています。

私のある知り合いの女性は見ていてもすごいなと思うんです。相手に対してきちっとものを申さねばならないときの強さ、押しの強さみたいなものと、1歩ちょっと、いい関係の人間関係の場面における非常に心優しい心配りするような感情、そういったものが両立しているべきであって、片一方だけがいいわけではない。そんなことをずっと思っていました。ですから、男性相談なんかの現場でも逆にそういう弱さを相談の中で問われることがあります。でも、それをプラスに転化するようなフォローというものが必要だろうと思います。「弱虫であるぼくって駄目ですよ」というような形の電話が入ったときに、それがプラスに見えていくような形、長所と短所、裏表みたいな言い方もあります。そういった要素でもいいかもしれませんが、むしろ逆に何でもかんでも自分の思い通りでなければならぬと思ってしまうよりはいいんじゃないかということも思います。そういったことを幼い頃から学びとるような形というものが、1つ大切なんだろうということをおもいます。

世間でよく言われていますように、DVを受ける女性にタイプがあったり、暴力を振るう男性にタイプがあるわけじゃないということもよく言われています。それは事実なんですけど、それでも何かないだろうかというのがちょっと新聞記事に出ました「DV 男の見分け方」です。これは、ほんとはタイプ分けなんかできないよというんだけど、ちょっと言ってみればということの中に、男女表現の逆というものも少し入れさせていただいています。ちょっと私のコメントも入ってるんですけど、今少しお話したようなことについて、DVについて語らせていただきました。

最近DVも犯罪行為として非常に、裁判になってからの結果もいろいろ問題のある判決はいっぱいありますし、事件そのものも非常に陰湿な部分があったりする。そういうときにやっぱり相談機関の持っている限界であったり、そういうものを問われることが多々あるなという気がしました。以前、西日本新聞の記者から何回か電話をもらったことがあります。幾つかのケースで、福岡でDVの不幸な事件がたくさんありました。例えば、もともと名古屋の男女が福岡で暮らしていて彼女が殺されてしまった。そのときに熱湯をかけられて、男はかけた状態で家を飛び出して、その炎症で彼女が亡くなってしまったケースがあります。

そのケースでも、もともとの出会いがもしかしたら問題があったのかもしれませんが、男性はホストさんでした。その部分をもしかしたら引きずっているのかもしれませんが、福岡に移ってからはまるでヒモ生活だったそうです。自分は働かずに彼女の稼ぎだけ。新しい土地に移って手っ取り早くお金を稼ぐという、風俗になってしまいます。彼女は風俗で働きました。でも、DV行為はやみませんでした。そうすると、全身あざだらけの女性

が風俗で働いていると、やっぱりその風俗のオーナーの側もそれでは困るという部分が出てくるんです。そうすると解雇してしまう。何とか潜り込んで、嫌だけれども稼ぐためにと思って入ったところでけられてしまう。でも男は金をせびることをいといませんから、親に金を出させようとする。すると親は、生活費生活費というけどそんな大金と思いがらも出してしまったりする。娘に質そうとしても、娘もその後ろに男がいますから、どうしてもお金が要るんだという形でしか返ってこない。不審に思いつつ警察にもなかなか届けなかったし、その方も相談機関に相談なさっていたけれどという場合もあって、非常に悲しい現実。

相談ってそうですね。ああしなさい、こうしなさいと言えない。やっぱりいろいろ直接的なアドバイスじゃなくて、状況に寄り添っているいろんなお声がけをしながら、その方が決断する形を整えていく形です。そういう意味で非常に難しいと思ってます。被害女性に対するそういう難しさがあると思います。ですから、ワーカーの側からすると別れたらいいのと思っていても、そうならずにもたよりを戻したりいろいろ繰り返していたりすることと、それをもっと加害男性にしたら、なおさらその彼の気づきを促すことの難しさというものはあります。

それは、こうしたら完璧ですよなんてことはなかなかなくて、やっぱりいろんなケースに寄り添いつつ、ある意味失敗を重ねつつと言ってもいいかもしれません。そしてそのときにより力量の高い臨床心理士さんがいたら、その方にこういう対応をしてきたけど、こういう形だったらもっとうまくいったんじゃないのといったことをもらいながら、自分を高めていく。あるいは何人かでそういった相談事業をしているとしたら、みんなの力量を高めていくということが必要なんだろうという気がしているんですけども、そういったことを女性相談・男性相談問わず、きちっとスーパーバイズしていくことも必要なんだろうと思います。

それともう1つ、豊中でしていて非常にこれからしていきたいと思って、先ほどデートDVのことをきちっとやっていきたいなということでお話ししました。それ以外にもう1つ言いますのは、これは一応今の段階では女性相談にかかわる部分だけなんですけども、例えば市の施設あるいは県の施設にしてもいろんな相談の窓口がありますよね。例えば、DVとか児童虐待ということでネットワークを組む相談窓口、あるいはそのケースを含めたいろんなネットワーク、それをどうしていくかということも大事ですし、もっと広くあらゆる相談にかかわる相談員の方々みんなの力量を高めることも必要だろうと今思ってます。今始めつつあるのは、どんな相談窓口にも市民の方が、あるいは県民の方が相談に乗ってもらおうと訪ねてこられたとしても、きちっと男女共同参画目線から見たときにちゃんと正しい対応をする相談員をいっぱいつくろう。そのための研修ということを始めました。まだ、実際にはそういうスーパーバイズの場合は用意していないんですけど、近々する予定なんですけど、今たくさん応募いただいています。うちからも派遣するという形で。

ですから、市なり県ですいているあらゆる相談窓口の人たちが、事務的につなぐ方もある

いは実際に相談に乗る方も含めて、みんながどんな目においても男女共同参画ということ
を頭に置いた形での対応ができることって非常に大切だと思ってます。それをどうしてい
くか。今とりあえず女性相談ということでスタートしたんですけど、もっと言えばほんと
は男性相談も含めて、ある意味相談という意味ではそういった男性相談も含めて、あるい
は県とか市とかいう形でしている相談以外でも、民間のいろんな窓口があるとしたら、そ
ういうところも含めてみんなで力量を上げていく。この分野だったら、男女共同参画どう
でもいいやということではあり得ないと思うんです。男女共同参画と言え、行政のいろ
んな施策すべてにかかわっているとっていいと思います。そういう意味では、そういつ
たいろんな相談窓口の人たちがそういったことをわきまえたうえで、法律相談に乗ります
とか、何とか相談に乗りますであるべきであるという気がしています。その辺もまた合わ
せてしていきたいなということの思いがあります。

最後にちょっとワークというか、「夜桜見物」というプリントがあります。これは実は夫
婦の会話なんですけど、私たちが相談ではこんなの使いませんが、DV 加害者とされる男
たちに向かってワークショップ形式のプログラムを開始したときに使ったプリントです。
もっと言いますと、当初は1日だけのプログラムとしてスタートし、それが5日6日ぐら
いのプログラムに拡充し、それがもっとアメリカまでの40週50週までいかないけど、20
回とか30回というレベルにだんだん広げてきているものがあるんですけども、そこに入る
前に少しそのときの私の体験をお話しします。

初めて6回ほどにまたがる、当時「非暴力プログラム」と言ってましたけど、私受付係
をしていました。あるいは事前申込の、あるいはその事前問い合わせの窓口をしてました。
そのときなんですけども、いついつから始めます、受講料としては幾ら幾らです、問い合
わせはどこそこへというような小口が一定出回った後なんですけども、問い合わせが女性
からの方が多いです。男に向かってメッセージを送っているのに女性からが多かったと
いうことが1つあります。結局、まだ決断としては別れてしまうということに至る前の段
階で、何とか変わってほしいという思いを持っている女性たちからの選択肢であるとい
うことを学びました。そういうことであるならば、そういう方々の相方である男たちを受け
入れるとしたら、その方たちの思いに、やっぱり送り出して良かったねと思ってもらえる
ような形の結果が出るような形というものをまず心がけたいと思いました。

そのときに先ほども言いましたけども、このプログラム、例えば6回だったら6回、10
回だったら10回のプログラムを受ければ、確実にあなたは暴力を振るわない男性に生まれ
変われますという保証書は出すまいと思いました。例えば、歴史のお勉強をしていて何回
かのコースを受けたときに修了書を形式的に発行することありますよね。そういう修了書
は発行すまい。アメリカなんかもそうです。そういうものはしない。逆に、公衆電話の最
低料金のお金をプレゼントするそうです。しんどくなったらこれで電話してきてねとい
うことが送り出すときの形で、決してあなたはもう大丈夫ですと太鼓判を押さないとい
うことがまずあります。

受付したのが金曜日の夜だったんですけど、申し込みがあつて、何人かの人たちが時間が来たという中で受講料を支払って、名簿をチェックしてということをしてしながら、私は思いました。非常に物腰の柔らかい柔らかい男たちだったんです。仕事帰りということもあるかもしれませんが、だけど、非常に物腰が柔らかくて、DVなんてこととは縁のない人たちに見える男たち。だから、他の形の受付していたらそんな無縁な人と思ってしまう人たちが、そういうDVを意識したプログラムに参加をされている。見た目だけじゃなくて、その物腰とか一切合切が決してタイプ分けできないなということをおもいました。むしろ、逆にその弱さみたいなものにも何か問題が潜んでいそうな気もしたぐらいです。

現実にワークが始まりますと、ケースケースでその方のことを自分でおっしゃると、かなりひどいケースがあつたりします。もう1つ女性たちのために何とかできないかなと思つてしまつた中にはこんなことがありました。彼1人だと絶対行かない。別居してるんですよ。なのに、彼女は私も一緒についていきます。その場は男だけの場にしてましたので、その場に彼女が入ることはできません。そしたらその時間は、ドーンセンターでしたので、例えば図書の方で時間をつぶしますとかいう形。別居している状態の中で、彼に変わつてほしいからではあるけれど、わざわざ一緒に来るといふ行為をすることで彼に参加させようとした。あるいはこんなこともありました。1人で行つてるケースです。ほんとは行つてるかどうか信用できないときに、電話がありまして、誰それの妻ですけど誰それ参加してますでしょうかということもありました。

その中で、女性たちが何とか、最終的には別れるという結論も含めてあるけれども、その前の段階で何とか変わつてほしいと思つていらつしゃるということでのそのワークというものの大切さを学びましたし、またそういう意味で男性相談というワークの中で、そういう加害者の問題というものが大事だなということもおもいました。

それと最近、今のワークスからちょっと離れて先言つてしまいますと、こんなケースが出てきてます。パワーハラスメントのケースです。男性相談という中で、パワーハラスメントで被害者とされる男たちに対してのフォロー。よく一般的に入ってきますよね。最近その加害の側に回つた男たちを気づかせるような電話相談、面接相談ができないだろうかということが、それはむしろ企業の側からも入つてきたりします。その被害者のためのフォローもしてほしい。とともに、そのパワハラをしまくっている人にも対応して変わつてほしいというようなこと。そういう意味で、そのDV加害者に対するのとはまた違つた形の新しい何か、どういう手だてというのか、中でその人に気づいてもらつていけるのかということのプログラム化というのか、フォローの仕方といったことも改めて問われているなと思つています。それはまだまだ試行錯誤なんです。

そういう人というのは、当然それは仕事の一環と思つてしまつてますし、決してパワハラをしていると思つてなくて、指導してやつてるのにというのがあります。それをどこまでどうしていくのかということも、1つのこれからの男性相談の新しい部分でどうしていくかというものをみんなでシェアしあいながら考えていかなければならないと思つています。

先ほどの「夜桜見物」というのは、DV 加害者とされる男たちが集まった場で、ワークシヨップ形式でそういった自分に気づいていただこうというためのプログラムをしたときのことです。アメリカなんかでも結構おもしろおかし系のワークを入れたりしながら工夫をなさってるんですけども、そういうことの1つです。これ、実は実話に近いです。その相談のワーカーの側、そういったプログラムを実施していく側のメンバーのお1人に実際に起こったことをベースにしました。これはそのワークの中では、このシートを使わずに、感情の揺れをチェックするような形でしました。それを夫婦の会話に置き換えたらこれになるということです。

AバージョンとBバージョンがあります。こちらの桜の名所ってどこになるんでしょうね。大阪市内ですと、環状線の桜宮という駅の寝屋川という川が流れてまして、そこの土手に桜がたくさん植わってます。1つの名所なんです。もう1つは大阪の造幣局の八重桜というのがあります。その2つが大阪に暮らしている者にとってイメージしやすい桜の名所なんです。それが素材になっています。夫はサラリーマンで、妻は専業主婦という設定です。平日の夜に待ち合わせをして、夜桜見物に行こうとした夫婦がいました。夫は仕事を終えてその待ち合わせの場所に行く。妻は家からその時間に合わせて行こうとする。実は、夫が先に到着しまして、妻が遅れるんです。そのときに感情シートの言えば、約束した時刻が来てるのに妻は現れない。あなたはどうしてますか。いらいらトゲトゲした気持ちがものすごく高じてますか。さほどでもないですか。5分とか10分後に彼女は来ました。そのときのあなたの気持ちはどうですか。怒り心頭に発するのか。事故でなくて安心と思うのかとか、そういう感情の変化といったものを追いかけていこうというようなワークです。

すみません、夫と妻をどちらかやってももらえません。Aの方で、どっちされます。どちらか。途中でちょっと場面転換するので、夫夫が続くところがありますけど。場所的に高知と大阪の違いがあるのでちょっと違和感があるかもしれませんが、それはご容赦ください。

「いつまで待たせんだよう、15分も遅刻だよ」

「何よ、あんただっていつも待たせるんじゃない、昨日だって」

「昨日は仕事、仕方ないだろう。どうせ何かこうてくことも忘れてんだろう」

「忘れてないわよ。あなたと一緒にしないでよ。わざわざ並んで買ったのに、こんな言われ方して」

「うるさい、仕事のなんか何も分からないのにぐちゃぐちゃ言うな。今日は花見だ、行くぞ」

「待ってよ、どうせ仕事のいらいらを私にぶつけてるだけじゃない。たかが15分の遅刻のことぐらい」

「ぼくの15分は貴重なんだ、君のルーズな時間と一緒にするなよ」

「ちょっとどっち行ってんのよ、天満橋はこっちよ」
「天満橋なんか行ってどうするんだ。通り抜けるだけだろう。何考えてるんだ」
「どうせ、私はアホですよ、世間知らずですよ、通り抜けじゃないのか、つまんないわ」
「ぶつぶつ言うなよ、こっちまで気分が悪くなる」

待ち合わせ場所から移動しまして、その桜の名所まで行きました。

「ええ、あれえ、なんでいつもこうなんだ。スムーズにいったためしがない」
「どうせ私と一緒にじゃあスムーズにいかないのよね。コンビニで傘を買ってきてよ」
「なんでぼくが買わなくちゃならないの。もういい、走って帰る」
「いいわよ、1人で帰るわよ」

ありがとうございました。いかがでした。結局悪いパターンの展開ですね。うまくフォローすれば変わったかもしれないけど、どんどん悪い方向に走ってしまうケースで、結構あっちこっちでこれしますと、皆さんおっしゃいます。私たち、いつもこうよ。夫婦の間であってもそうじゃなくても、どうしてもなりがちな場面で、實在に近いと言いましたけど、そういうことはよく起こり得る話なんです。

次、Bなんですけど、Bをちょっとやってみてもらえます。

「やっと来てくれた。遅いからいらいらするし心配だし」
「ごめん、待たせたわね、あなたの好きな大福を買おうと思って行ったら行列で」
「えっ、わざわざ大福を買いに行ってくれたの、すまないね。それにぼくは昨日随分待たせたね。遅刻はお互いちゃらだね」
「そうね、ちゃらにしてあげるわ。あなたにはいらいらさせたけど、大福で機嫌を直してね」
「はいはい、大福様のおかげで仕事のいらいらも消えそうです。ありがたいありがたい、今日は素敵な花見になりそうだ」
「待ってよ、そんなに急いで歩かないでよ、心配ないんだからゆっくり歩きましょうよ、桜は散らないわよ」
「そりゃあそうだ。こんな時間こそ大切にしないと。あせらない、慌てない」
「あなた、天満橋はこっちよ、通り抜けって天満橋でしょ」
「そうか、通り抜けもあったな。でもあっちは一緒かなと、今日は桜宮」
「ええ、そうだったわ、てっきり通り抜けだと思ってたわ、そそっかしいわね、私って」
「おかげさまで、私はこうして暮らしておられるわけですが」

ここで場面転換します。

「あれ、雨だ。ここまで来たのにね、せっかく買ってくれた大福を桜の下で食べようと思っていたのに残念」

「花より団子、コンビニで傘を買ってあっちに歩いていかない。花見より久しぶりよ」

「あっちもいいねえ、そこで大福を食べようか、ついでにお茶も買って入ろう」

「うん、いいわね、どきどきしちゃう」

Bがよいような、何かこそばいような感じもしてしまうんですが、ただ、ここまでいくかどうか別として、これも文章の書き方もっと工夫するべきなのかもしれないということも含めてなんですけど、ただ、Aバージョンでいいわけがないと思うんですね。それをBがいいのか、Bに近づく別の形がいいのかは別として、ちょっと工夫が必要だろうな。それが得てして日常会話の中で起こり得る話。男たちは特にこういうパターンにはまりがちな要素がある。これはほんとは男女ともにと言うべきなのかもしれないけど、より男性に陥りやすい側面がある。それをどう工夫していくかということによって随分変わっていくんじゃないか。男性相談にしる女性相談にしる、夫婦の間の諸々という、当然皆さんも受けていらっしゃる方は相談に乗っているいろいろなさってきましたね。

でも、このベースの通りこういうことで少し工夫があればもっと解決できたはずのことってたくさんあるじゃないですか。そういったものをどう気づいてもらえるのか。そういうものを具体的に気づくという意味では、電話とか面談というよりはこういうワークの方が適切かもしれないということで、アメリカなんかもこういった具体的なことを結構積み重ねていらっしゃると思います。逆に言えば、なんでこれがDVの研修なのというようにも思えるような部分なんですけれども、根底で言えばそれにつながっていくような形というのが多分にあるような気がします。

Bですね、いつもこれしながら思うんですね、雨降ってしまってお2人どこへ行かれたんだろうなというのがちょっと気になって、実はその桜宮というところはラブホテル街でもあります。お茶と大福を持って久々にということもあるかもしれない。それは余談ですけども、何かこういうひと工夫をして、ワークでなくて電話相談なんかでもちょっと何かそういうような方向性みたいなことも合わせて、気づきの中に入れていけたら非常にいいなとは思ってます。どんどんこじれていけば、もう大問題の大きな大きな問題なんだけども、その根っこの部分で言えば、ちょっとしたずれみたいなものですよ。

そこを女性相談にしる男性相談にしる、ちょっと少し方向性を違うように見えるような仕掛けを用意することによって、気づいていただけることとして方向性がある。せっかく出会った2人であるならば、別れるというのも大きな選択肢として大事なことなんだけど、別れずに済めばそれに越したことはないだろうしということと、ともにそのときに別れることをマイナスに示すんじゃなくて、それもプラスのメッセージとして、そういうことも

ありということはしないといけないと思ってるんですけどもあるだろう。特に男性の場合に、こういった今のワークのような部分でうまく対処していく。フォローしていくことをどこかで学びとっていく。

例えば、私たちがよくやっているワークの中の1つで言えば、相手を誉め合いっこするとか。夫婦の中で、この2週間ほどで「ありがとう」と言ったのはあったかなとか振り返ってみるとか、そういうときにちょっとあのとき一言「ありがとう」と言ったら後の険悪ムードなかったのとかあると思うんですよ。しかもよくあるのは、女性の側は比較的夫婦の間に何かあるときも「ありがとう」という言葉をうまく使うことによって、ぎくしゃくするのをうまく収めていくような会話をなさっているケースが多いと思うんですけど、男たちもそういったことをかなり意識的に出せるとしたら随分関係性も変わっていくだろう。

そうしたことが日常的にあれば、男性相談・女性相談という中で、もう別れますとかいう形にならない。あるいはDVにしたって、そういう暴力行為を起こさないでお互いが理解し合えばそこに至らないわけで、そういったものをどう自分の中に取り込んでいくかということの大切さみたいなものを、皆さん方も普段もなさっているでしょうけれども、共々に工夫しながら、どっちにとってもいい社会をつくるための相談事業として、女性相談・男性相談を問わず、そういう場として生かし合える。そしてまたいろんなものを共通してフォローし合える、シェアし合えるような場というものを非常に大切にしながらできていたらいいなという気はしております。

少しまだ4時半というには時間ありますけど、とりあえず私の方からの一方的な話としてはこれで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。